

源賴朝征夷大將軍辭任説について

大森 金五郎

國家學會雜誌第四十五卷第六號（昭和六年六月號）に「鎌倉幕府職制二題」といふ問題が掲載されてある。その一は源賴朝の征夷大將軍辭任説に關するもの、他の一は追捕使に關するものである。追捕使の方はさて置き、征夷大將軍問題については聊か陳べて見たいと思ふところがあるから、是より概評することを許されたい。

一

一體この論の要點はどこにあるかといふに、鎌倉幕府の政所下文の形式は四度の變遷を経て居り初は政所下文、次は前右大將家政所下文、次は將軍家政所下文、次は又前右大將家政所下文となりつゝ四度の變遷があるのである。第一、第二、第三は宜しいが、第四に前右大將家政所下文に復歸したのは如何なる譯か、これは何等か理由がなくてはなるまい。古文書を取扱つて行く上、こゝに疑問を起したのであるが、たゞ／＼尊卑分脈を見たるに、賴朝の條に同（建久）三、七、十二爲征夷大將軍、同五、十、十辭將軍とある。第三の將軍家政所下文となつたのは丁度賴朝が征夷大將

軍に任ぜられた時代、第四の前右大將家政所下文に立戻つたのは、尊卑分脈の所謂「辭將軍」の時代に該當するので（但し第三第四に多少の取除けあり）尊卑分脈の記すところは虚事ではあるまい、またさう解釋する外に適當の説明は無いと思はれる、（以上論者の所論の要點）として以下次第に説くところがあるのである。

二

成る程この説はそこだけを聞けば一應尤に聞こゆるのであるが、一體實錄の書に賴朝の事をどう書いてあるか、征夷大將軍を辭任したといふ形跡が見えるかどうか、たゞ尊卑分脈にあるだけでは如何にも覺束ないものであるのである。尊卑分脈は系圖書としては稍や善い方ではあるが、その記事は眞偽が混じて居るのである。

よつて先づ吾妻鏡について見るに、この書は賴朝の時代は殊に記事が豊富であるが、賴朝が征夷大將軍を辭したなどといふ事は一向に見えないばかりでなく、賴朝の事を記するに、或は武衛（前右大將）といひ、或は二品又は二位家といひ、或は前右大將家といひ、或は將軍家と、いひ、その時々について正しい適當の名稱で記してあるのである。例へば

壽永三、十、廿七

正四位

（武衛）

吾妻鏡に記した名稱

元暦二、四、廿七

從二位

（二品）

文治五 正、五

正二位

（二品又は二位家）

建久元、十一、九

權大納言

同 元、十一、廿四

右大將（兼）

同 元、十二、三

辭兩官（前右大將）

同 三、七、十二

征夷大將軍（將軍）

同 五、十二、廿八

將軍家、並御臺所若公等、

同 六、十二、廿二

將軍家入（御藤九郎盛長甘繩家）

前記の如くその時に從ひ適當の名稱で一貫して書いてある。而して將軍といふ書き方は建久三年七月より同六年十二月廿二日まで（但し建久七年以下に及んで居て、その間連續して何時も將軍と記してある。

正治元年まで吾妻鏡は缺逸して居る）

三

公卿補任について見れば、建久三年より同十年即ち正治元年薨去に至るまで征夷大將軍として記してある。即ち左の如くである。

建久三年

前權大納言

正二位

源賴朝四十六 七月十二日

爲征夷大將軍

源賴朝征夷大將軍辭任記について（大森金五郎）

建久四年

前權大納言 正二位 源賴朝四十七 征夷大將軍

建久五年

前權大納言 正二位 源賴朝四十八 征夷大將軍

（建久六年七年八年九年同斷につき略す）

建久十年 四月改元爲正治

前權大納言 正二位 源賴朝五十三 征夷大將軍

正月十一日依病出家、同十三日薨于 相模國鎌倉館、

とある。なほ其の外、九條兼實の日記玉海にはどうかといふに、この書は終始「賴朝卿」として記してあつて、將軍の名は見えぬから、参照にはし難い。公卿の日記は多くは前右大將家とか前右幕下など記すのを常とする。鎌倉にても普通の場合には前右幕下とか前右大將とかいひ、征夷大將軍とは滅多にいはない。征夷大將軍といふ名は餘りよそ／＼しくて賴朝を指す名としては親しみが無い。同じ將軍といふにしても鎌倉將軍とか前右大將軍などいふ場合が多い。併し愚管抄を見ると此の書には多くの場合單に賴朝と記してあるが「同十年（建久）正月ニ關東將軍所勞不快トカヤホノカニ云シ程ニ、ヤガテ正月十一日出家シテ、同十三日ウセニケリト」とある。また業實王記正治元年正月十八日の條に「庚戌關東前右大將賴朝去十一日依ニ所勞ニ通世之由有ニ風聞、裏書に云、後聞、賴朝將軍宣旨云々」とある。此兩者を併せ考へれば、關東將軍の賴朝が薨去したから、賴家に直ちに將軍宣下（これは少し後の）があつたとの風聞で賴朝が當時將軍たりし傍證となるべきではあるまいか。（論者曰く、明月記正治元年正月二十日の條に賴朝の事を前將軍（前將軍）とあると。しかし思ふに廿日は賴朝の死後であるから故將軍の意とも見られる。されば生前は將軍といつて居たかに察しられる。）

四

一體賴朝が權大納言、右大將を辭したのはどういふ譯かといふに、之は一つには高位高官に昇ることは兼てより謙退して居り、又一つには折角高位高官を賜はられても自身關東に居るので、之に對する勤めが出来かねるとの趣意からと思はれる。高位高官に昇るを希望するは古今の人情なるに賴朝が斯くの如く謙退するのは世にも珍らしき事である。なほ此の時のみに限らず、勤功の賞を辭退した事は一再にして止まらぬのである。）

さて賴朝は建久元年十一月に上洛したるについて、院宣を給はつて權大納言に任じ給うたのである。その院宣は次の如くである。

依ニ勤功賞、所レ被ニ任ニ權大納言也、度々雖レ被ニ仰遣、依レ令ニ謙退申、于レ今無ニ其沙汰、而忽有ニ上洛、爭背ニ先規ニ裁、參入之時、先欲レ被ニ觸仰ニ之處、令ニ早出ニ給之間、無ニ左右ニ所レ被ニ行ニ除書

也、於_レ今者、不_レ可_レ有_二異議_一、可_下令_レ存_二其旨_一給、兼又可_レ聽_二勅授_一之由、同被_二宣下_一畢者、院宣如_レ此、仍執達如_レ件、

十一月九日

民部卿

謹上 新大納言殿

されども賴朝が之を辭退すべきことは廷臣間に於ても略々推察したのであつた。右に對して賴朝は請文を呈出したが、それにも辭退の事をほのめかして居る。勅授即ち勅授帶劔のみはお受けをしたのである。その請文に曰く

拜_二任權大納言_一事、恐悅申候、但候關東之時、任官事雖_下被_二仰下_一候、存旨候天、申_二辭退_一候畢而今被_二仰下_一候之時、面目雖_レ無_レ極候、乍_レ恐所_下申_二辭退_一候也、辭申之旨、納候はんをもて、朝恩、深と可_レ存候、兼又可_レ聽_二勅授_一事、畏承候畢、以_二此旨_一可_下令_二洩達_一給_上候、賴朝恐惶謹言、

十一月

追啓

被_二仰下_一候之後、辭申候之條、猶以恐思給候、勅授事、重々畏申候也、以_二其旨_一、可_レ然之様、可_下令_二披露_一給_上候、重恐惶謹言、

右様に御辭退の旨を書き添へて請文を呈出して居るのである。廿四日には右近衛大將を兼任された。

されども十二月三日京を去つて鎌倉へ歸還するに際して兩官を辭退されたのである。

次に建久三年七月に征夷大將軍に任ぜられた時の記事を見るに、

廿五日丙申、勅使廳官肥後介中原景良、同康定等參着す、征夷大將軍の除書を持參する所なり、兩人_{各衣冠}例に任せ鶴岡の扁庭に列立す、使者を以て除書を進ずべき由之を申す、三浦義澄は邊はさる、義澄は比企左衛門尉能員、和田三郎宗實、並に郎從十人_{各甲}を相具して彼狀を請取り、則ち歸參す、幕下_{御東}豫め西廊に出御す、義澄除書を捧持して膝行して進む、千萬人中、義澄此役に應ず、面目絶妙なり、云々、

除書に云ふ

征夷使

大將軍 源賴朝

從五位下源信友

左衛門督通親 參陣、參議兼忠卿書之、

將軍の事、本より御意を懸けらるゝと雖も、今に遷せしめ給はず、而るに法皇_{（俊白河）}崩御の後、朝政の初度に殊に沙汰ありて任ぜらるゝの間、故らに以て勅使に及ぶ、云々、

以上の文面から考察すれば、賴朝は征夷大將軍となることは豫てより希望して居たのである。さ

れども法皇の御代には其事協はなかつたが、後鳥羽天皇新政の始に當つて此御沙汰があつたといふのである。一體賴朝が征夷大將軍たる事を希望して居たのに如何なる理由かといふに、これは武門の棟梁として何か然るべき名稱がある事を適當と考へたらしい。武衛といひ、二品といひ、また右大將家といひ、時々變ずることは面白くないのである。例へば政所、侍所でも長官は別當といふ名稱があり、間注所では長官を執事といふ。それが一貫した名稱である。後には北條氏の執權といふ名稱も生じたのである。それが幕府の長上官たるものに何といふ名稱もないといふは如何はしき事である。（なほ参照すべきは玉海の記事で、賴朝は右大將に任ぜられた時、藤原兼實と應對の際、自らの事を朝ノ大將軍といひ、その辭任して歸東の際には前大將、前將軍の名が同書に互文に見える）北畠親房の職原抄にも征夷使の事を次の如く書いてある。

征夷使 大將軍一人 征夷は日本武尊に始まり兵事ある毎に征帥を遣はすなり、粗く舊記を見るに未だ鎮府を置かざる已往東征の人或は按察使となり、或は鎮守將軍となる、文屋綿丸以來征夷將軍の號あり、云々、愚按ずるに、鎮府に於ては已に鎮將あり、之に依て重ねて將帥を遣すの日に臨んで征夷の號を加ふか、坂上田村麻呂は征夷將軍と稱す、………源義仲朝臣京上暫く兵權を執るの日、征夷將軍に任ぜず、云々、其後また權大納言右近衛大將源賴朝卿兩職を辭して軍國へ歸るの後、勅ありて征夷大將軍に任ぜらる、爾來連綿として賴家少將の時より之を兼ね云々、

凡そ朝賴卿補するの後、征夷の仁を重ずるにはより鎮守を並び任ぜず、云々

蓋しこは當を得た記述であると思はれる。

五

然らば賴朝がこの征夷大將軍を辭退するといふ事があるべきものか、吾等は想像することが困難なのである。よし又賴朝が假りに之を辭退したと假定するも、朝廷でこれを容易に御聽届けになるべきものであらうか。建仁元年十二月十五日に源賴家が上表して左衛門督を辭退した際にも、朝廷は御聽届けがなかつたのである。よしや又賴朝が之を辭退し朝廷が又これを御聽届けになつたとしたならば、これは内々の儀ではないから、その次第を當時の信據すべき記録（殊に吾妻鏡）に詳記すべき筈であると思はるゝのに、前記の通り、尊卑分脈（尊卑分脈を原として作れる系圖は同断）以外には聊かもその事の見えないのに第一の不審である。更に又考へて見るに建久五年十月十日（即ち征夷將軍を辭したといふ日）とは如何なる時かといふに、その前日即ち九日には賴朝は小山朝政の家に到り、弓馬に堪能の輩を召聚め、流鏑馬以下作物射樣等の故實を取調べられた。これ明年上洛の次に住吉社に御参りありて、流鏑馬を行はれんが爲である。十三日には永福寺内新造の堂の供養の爲め使節を遣はされ廿五日には勝長壽院に於て如法經十種供養あるにより賴朝は御臺所と共に参詣あり、右様を譯で少しも將軍職を辭退すべき模様などは見えて居ない。加之、十二月十七日には明春上洛について供奉

の輩を取定められて居る。而して翌年即ち建久六年二月十四日には賴朝は御臺所並に男女御息等を相具して上洛の途につかれ、東大寺の供養、清水の參詣等をせられて居る。なほ上洛の途次、三月四日、賴朝が江州にさしかゝるや、台嶺の衆徒等が勢多橋の邊に集まつて何事かせんとして居たので、小鹿嶋橋次公業を遣はして子細を問はせられたが、其時公業の言葉に鎌倉將軍東大寺供養結縁のため上洛するところ、各々群集するは何事によるか云々とあつた。こゝでも明かに將軍の名稱を用ひて居るのである。して見れば吾等は當時賴朝が將軍職を辭退して居るものとは思はれない。これも第二の不審である。

六

次に征夷大將軍家政所下文といふは、公式の上では立派であるが、當時關東の將士等はその下文を頂戴することを喜んだかといふに、事實はこれに反對のやうである。一二の例を挙げれば、千葉常胤の例などがそれで、從來の下文には賴朝の花押を載せてあつたが、將軍家の政所下文には家司等の署名のみであつたので、千葉常胤などは之を嫌ひ、以前の通り賴朝の御判を副置かれんことを申請うて居る。即ち吾妻鏡建久三年八月五日の條に、

將軍に補せしめ給ふの後、今日政所始めなり、則ち渡御すとあり、而して其際千葉常胤は將軍家政所下文を嫌うた次第は、

千葉介常胤に先づ御下文を給ふ、而るに御上階以前は御判を下文に載せられ訖ぬ、政所を始置るゝの後は之を召返され、政所下文に成さるゝ處、常胤頗る確執し、政所下文と謂ふは家司等の署名なり、後鑒に備へ難し、常胤の分に於ては別に御判を副置かれ、子孫末代の龜鏡たるべきの由之を申請ふ、仍て所望の如くす、云々、

とあるは即ちそれである。而もこの時始めての下文は次の如きもので、後にある普通の將軍家政所下文とは異つて居る。

被載御判

下總國住人常胤

可_レ早領_二宰相傳所領新給所々地頭職_一事

右去治承比、平家擅_レ世者、忽_二緒王化_一、剩圖_二逆節_一、愛欲_レ追討_二件賊徒_一、運_二籌策_一之處、常胤奉_レ仰_二朝威_一、參_二向最前_一之後、云_二合戰之功績_一、云_二奉公忠節_一、勝_二傍輩_一、致_二勤厚_一、仍_二判傳所領_一、又依_二軍賞_一宛給所々等、地頭職所_レ成_二給政所下文_一也、任_二其狀_一、至_二子子孫_一、不_レ可_レ有_二相違_一之狀如件、

建久三年八月五日

これは常胤ばかりではあるまい。當時鎌倉の老將耆宿の輩はかういふ考の者が多かつたであらう。即ち公式上立派なものよりは、賴朝の直筆か、花押のすはつたものを珍重し、之を子孫までの家寶

としようといふのが、當時の武士氣質で、又尤なことと思はれる。されば建久三年九月十二日小山朝政に賜はつた下文は將軍家政所の下文に更に賴朝の添狀がついて居るのである。即ち

(一)……將軍家政所下 下野國日向郷住人

補任地頭職事

左衛門尉藤原朝政

右 壽永二年八月日御下文云、以件人補任彼職者、今依仰成賜下文之狀如件、以下

建久三年九月十二日

案主 藤井（花押）

令民部少丞藤原（花押）

知家事 中原（花押）

別當前因幡守中原朝臣（花押）

(二)……（賴朝）（花押）

下 下野國左衛門尉朝政

可下早任政所下文旨領掌所々地頭職事

右件所々所成賜政所下文也、任其狀可領掌之狀如件

建久三年九月十二日

かういふやうに賴朝の添狀がついて始めて將士等が満足したのである。（これから考へて見れば千葉

常胤の分もあの外に將軍家政所下文が別にあつたかと思はれる）當初の間は下文と添狀との二通を出して居たことであらうが、随分手數なことであるから、追々には一通で済すやうな簡便法が行はれるに至るべきは當然の事ではあるまいか。それゆゑ追々には前右大將家政所下文などが混用され（將軍家政所下文の中に）後にはこの方が却て多きを占むるに至つたのではあるまいか。（論者も既に一二の例外を擧げて居るが、かういふ類は調査が進めば猶ほ増加するかも知れぬ。なほ右大將家政所下文の際に賴朝の添狀なしで將士もあまんにて居た點をも考慮に入れる）又名稱の上でも前右大將家の方が親しみがあつた、直ちに賴朝を聯想するが、征夷大將軍といふとシカツメラシクして稍々冷やかに感ぜられるのである。自分はこれだけの理由で充分解さ得たとは思はないが、前右大將家の下文が復活した理由の一部分の説明にはなるかと思ふ。またかういふ風に考へたならば強ち將軍職を辭退したと見なくても理解されるかと思ふ。

次に試みに賴家將軍の際を見るに賴家は正治元年二月に家督を嗣いだが、種々都合があつたものと見えて、その將軍宣下のあつたのは建仁二年七月廿三日で、それから翌年九月まで足かけ一年ばかり將軍職に居たのである。然しながら其間に征夷大將家政所下文は僅かに一通存するのみである。僅か一年と雖も天下の事の多さに對して一通のみとは如何なものか、家督相續以來を通じていへば五年に渡るのであるが、その間普通の簡便な下文が行はれた事のやうに思はれる。なほ是等に關しては充分の調査を遂げたいと思ふが今は多忙を極めて居るから、今回はこゝに擱筆する。（二月七日記）